

フィラリア症を予防しましょう

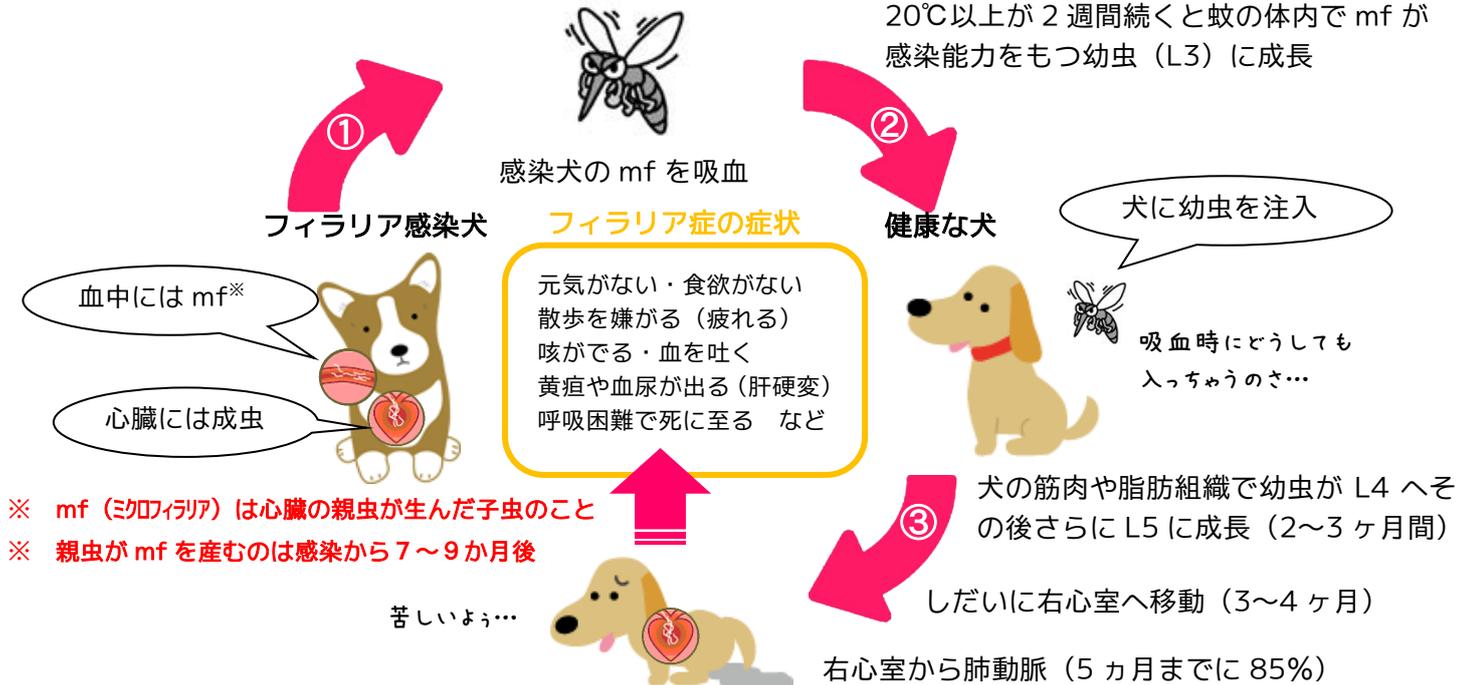


🐾 フィラリアってなあに？

フィラリアとは犬の心臓に寄生する犬糸状虫（学名 *Dirofilaria immitis*）のことです。

ディロフィラリア・イミティス

20℃以上が2週間続くと蚊の体内でmfが感染能力をもつ幼虫（L3）に成長



肺動脈から再び右心室へ移動して成虫に（最初の感染から6～7ヵ月）

🐾 フィラリア症にはかかりたくない！

昔は多くのワンちゃんがフィラリア症で苦しい思いをして命を落としていました。予防薬が開発されても、毎日の投薬が必要だったり副作用が強かったり安全に使えるお薬がありませんでした。

現在では月1回（当院では40日ごと）、安全なお薬で予防できます

★蚊に刺されてもあわてない！ 駆虫のチャンスは③の時！！

★蚊がいなくなっても安心しない！ 刺された後に駆虫するお薬です！

🐾 どうしたらいいの？

① 4月末（中旬でも可）から5月末（できれば20日頃）までに来院してフィラリア検査（血液検査）を受ける。 ※4月の早い時期には検出できません

② 検査で問題がなければお薬をもらい、指定された日から投薬開始（当院では5月20日から12月10日ごろまで計6回）。

飼い主さんがやることはたったこれだけ！

※ 昨年冬生まれの子は検査なしでお薬が飲めます。

※ 昨年予防をしていてもシーズン最初の投薬時には必ずフィラリア検査が必要です。

↓↓次のページはもっと詳しく知りたい方だけ読んでみてください↓↓

🐾 どうして検査する必要があるの？

フィラリア予防のお薬は「予防」ではなく「駆虫」するお薬です。本来 L3～L4 子虫を駆虫しますが mf にも効いてしまいます。万が一感染していて血液中に mf がいる時にお薬を使うと、死滅した mf が肺の血管や末梢血管で詰まってしまい、ワンちゃんがショック死するなど大変なことになる可能性があります。飲ませ忘れがあった年はもちろん、しっかり飲ませていても飼い主さんが見えないところでワンちゃんが吐き出していたり、万が一ということもあるので、要指示薬であるお薬の能書にも記載されているように、投薬前は必ず血液中の mf を確認する必要があります。

🐾 どんな検査をするの？

一度でも夏を越したことがあるワンちゃんは、昨年フィラリアに感染していないか、あるいは昨年きちんと予防できていたかを確認するため、

- ① 血液中に mf がいないかどうか
- ② 心臓に成虫がいないかどうか

という検査をおこないます。現在の検査技術で検出可能なのは心臓や肺動脈に寄生するフィラリア成虫と、雌雄の成虫が交尾をして算出した血液中の mf の検出です。

お薬を飲むだけなら①の検査だけでも良いのですが、万が一感染した時のフィラリア症の問題は将来的な心不全の発症にあるため、感染の有無（成虫の有無）を明らかにする必要があります。mf が陽性なら成虫はほぼ確実にいますが、mf 陰性なら成虫陰性とは限りません。その理由は…

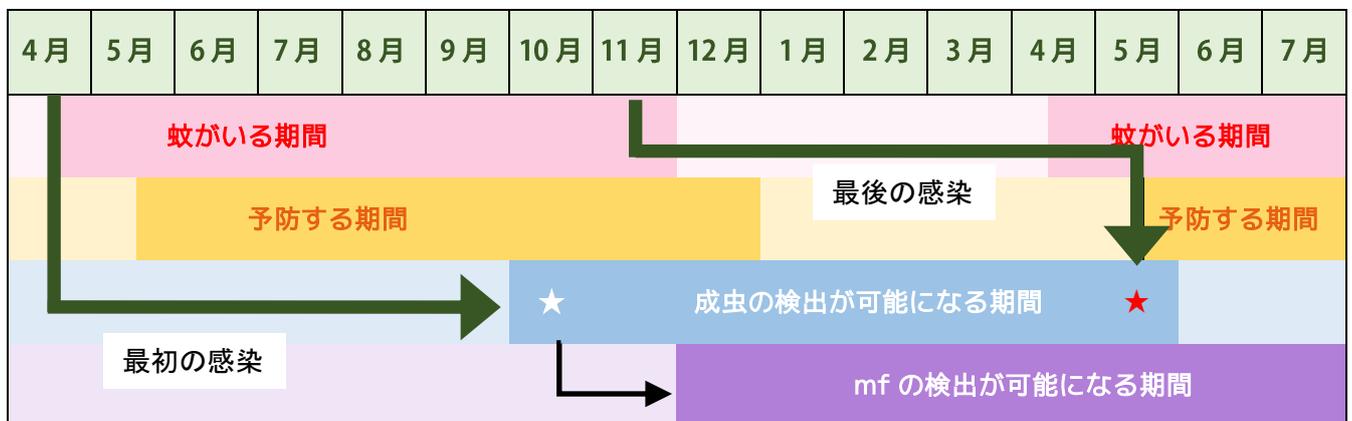
- たまたま雌雄どちらかの成虫しかいない場合は mf は生まれませんが心臓にはいる。
- 心臓にいるのはまだ mf を産めない若い成虫かもしれない。

というケースもあるからです。ちなみに成虫の寿命は 5～6 年、mf は 1～2 年なので、成虫が死滅したあと血液中に mf が残っていることもあります。

もし血液中に mf がいる場合、予防薬の投薬日にショックがおきないようにするお薬と一緒に使います。

🐾 どうして検査をする時期が決まっているの？

フィラリア検査は成虫と mf を検出する検査です。つまり犬の体内に成虫や mf が存在するようになるまで検出できません。



4 月にもし感染したとして、その時のフィラリアが成虫になるのは同年の 10 月ですが、都内でフィラリア感染能力をもつ蚊は 11 月末までいるので、最後に感染した場合のフィラリアが成虫になるのは翌年の 5 月末（★）です。

したがって本当は5月上旬～中旬くらい（予防の直前くらい）に検査をするのが最も望ましいのですが、全ての方をこの期間に検査するのは難しく、飲ませ忘れがない場合には4月末（現在では中旬からでもOKにしています）からOKとしています。

今後は温暖化の影響により蚊が出始める時期、蚊がいなくなる時期がずれていく可能性もあります。冬場に越冬する蚊もいますが、フィラリアは20℃以上が2週間ほど続かないと蚊の体内で成長できないため、冬場の蚊にはフィラリア感染能力がないとされています。

ただしアカイエカなど越冬するタイプでも室内に入り込んだ場合は暖房により活動する可能性があり、チカイエカのように寒さに強く越冬しない蚊もいます。

現在はほとんどの飼い主さんたちが予防してくれているので、都心ではフィラリアを保有した蚊がかなり減ってきていますが、予防せずにいるとフィラリアを保有している蚊が増えてしまい、越冬する蚊、室内に入り込んでくる蚊のフィラリア保有率が高くなります。

せっかく予防しているワンちゃんも冬は予防を終了しているので、室内に入り込む蚊のフィラリア保有率が高くなれば、冬場でも暖かい室内で感染するようになる日が来てしまうかもしれません。

今のところ当院では通年予防は推奨していませんが、今後はどうなるかしっかり動静をみていかないといけないと思っています。

🐾 どうして投薬期間が決まっているの？

フィラリア予防薬は本当は予防薬ではなく「駆虫薬」です。感染したあと図の③の時期、つまり感染してから血液中にフィラリア幼虫が入り込むまでの間に駆虫するお薬です。従って刺されてすぐに投薬する必要はありません。

いっぽうで、蚊がいなくなったからと言って12月上旬の最後の投薬を忘れてしまうと、11月末に感染したフィラリアを駆虫できず感染が成立してしまいます。従って蚊が出始めてからおおよそ1か月後の5月中旬から投薬を開始し、蚊がいなくなったあと（都内では例年11月25日ごろ）に最後の投薬が必要になります。

🐾 どうして40日ごとの投薬でいいの？

一般的な動物病院ではお薬の能書どおり1ヶ月に1回の処方をしており、多いところでは4月1日～12月1日まで計9回の投薬をさせられるところもあります。でも安全なお薬とはいえ無害ではありません。前述した図やこれまでの説明から4月1日の投薬は完全に無意味だということがわかると思います。

また、投薬間隔についても③の時期は最大で2カ月あるので、感染した（と想定した）日から2ヶ月以内に投薬すれば駆虫できるはずですが、ただ2ヶ月待つのは万が一を考えると危険。それなら1ヶ月半ごとでも良いですが、忘れやすいのでメーカーは1ヶ月ごとの投与を推奨しているわけです。

したがって当院では日付を決めて、5月20日ごろから覚えやすいように6月30日、8月10日、9月20日、10月30日、12月10日の計6回で済むようにしています。

この方法でも忘れずに飲めていれば感染が成立することはありません。